



Title	王宮建築の機能と形態 : 中央アフリカ, カメルーンの事例
Author(s)	下休場, 千秋
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 168-169
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52953
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

王宮建築の機能と形態

— 中央アフリカ、カメルーンの事例 —

下休場千秋／大阪芸術大学

1 はじめに

ヒトと自然の関係を再考するためには、地球上の多様な自然環境と、そこに暮らす異なる文化をもつ人間とによって描き出される「風土景観」を理解することが有用である。筆者は風土景観の一事例として、中央アフリカ、カメルーン共和国北西州、標高1,000m前後の高原地帯に居住する農耕民ティカール(Tikar)の王宮建築の機能と形態について、これまでの現地調査で得た情報を基に考察する。ティカールの人びとは、北西州を中心に200以上の王制社会組織をもつ首長国群を形成している。

2 ティカールの伝統的民家

王宮建築は一般的な民家の建築様式を基本として、規模がより大きく、空間の機能と構造が複雑化している。そのため、まずティカールの民家の特徴について考察する。

ティカールの伝統的民家の特徴は以下のようにとまとめることができる。

- ① 屋敷林や屋敷畑を周囲におき、複数の家屋が庭を囲むような形に配置された多棟型民家形態であり、屋敷は塀で囲まれることがない。
- ② 伝統的民家の家屋形態は、ラフィアヤシの葉柄を壁や屋根の部材として用いた泥の塗壁、草葺き、無窓、一部屋、土間構造である。
- ③ トウモロコシ等の収穫した農作物用の穀倉をもたず、天井裏に貯蔵する。
- ④ 家屋の新改築、修復は家族や共同体の人々の相互扶助により行われ、専門の建築職人がいない。

がない。

- ⑤ 家長の父親を世襲した息子夫婦は両親の屋敷に居住する。結婚し独立したその他の子供は別に新しい屋敷を構える。
- ⑥ 同一家屋に思春期以上の男女が住むことはない。一夫多妻の場合、夫と複数の妻はそれぞれ別々の家屋に居住するため、屋敷には家族構成に合わせて複数の家屋が庭を囲むかたちで建てられる。
- ⑦ 男性と女性の生活空間が分離している。男性は祖霊や精霊の信仰に関する儀礼祭祀を行うことから、男性の空間には儀礼の場が存在する。一方、女性の空間は料理や子育て等の日常的生活機能を主として有しており、そこでは家族に病気や事故などの災難があった場合、「双子の壺」の儀礼が行われる。

雨季と乾季が明確な草原地域に居住するティカールの人びとは、自生するラフィアヤシを建築部材とする自然環境に適応した伝統的民家を建築してきた。しかし、彼らの現在の民家には、建築材料、構法、間取り、意匠などに変化が見られる。王宮建築も例外ではなく、現在では日干しレンガ壁とトタン屋根の建築様式が一般的である。

また、第一次世界大戦以前のドイツ植民地時代にドイツ人によって建てられた王宮建築が現存しており、それらは文化遺産として観光資源の価値を有し始めている。

3 王宮建築の機能と形態

王宮は現在も王とその家族が居住する場であると同時に、複雑な王制社会組織の機能を

発揮する拠点としての役割を果たしている。

王宮建築の形態を説明するには、王制社会組織の特徴について理解しておく必要がある。そもそも王とは、宗教的権威をもち神聖王として人びとから尊敬される存在であり、毎年、王宮では様々な年中行事が繰り広げられる。また、王制社会において後継王を決定するような有力な長老組織は秘密結社として理解されている。祖霊崇拜とアニミズムを基本とする土着宗教観に支えられたそれらの秘密結社の活動も王宮を中心に行われる。そのため、王宮内には秘密結社が儀礼祭祀を行うための多くの建物や中庭が存在する。王宮におけるこれらの空間構造と機能を考察することが、王制社会組織の理解にもつながるといえる。

王宮建築の機能と形態の特徴は、次のようにまとめることができる。

- ① 最高の宗教的権威者として位置づけられる王の居住場所は、「聖なる森」を背後にした奥まった空間にある。王宮は歴代王の墓所でもあり、毎年、王と秘密結社員は墓所において祖霊供養を行う。
- ② 王権を支える秘密結社の空間は王の居住場所と森の双方に隣接したところにある。王家の男性はこの空間に立ち入ることができない。
- ③ 王及び男性王族と秘密結社員が共に儀礼祭祀を行う空間が①と②の間にある。
- ④ 王の妻子が生活する女性と子供の空間は、王宮の入口に近いところにある。

ティカールの人びとが伝承してきた王宮建築の特徴は、伝統的民家形式を基本として、王制社会組織がもつ多様な機能に対応するために、多数の家屋と塀で区画された複雑な空間構造が形成されているところにある。

土着宗教に基づく神聖王を中心とする信仰は、現在も根強く残っており、ティカールの多くの王宮建築に共通するこれらの機能と形

態は、彼らの王制社会組織の特徴を明確に示しているといえる。

4 おわりに

近代化により自然や土地の風土特性を無視した画一的な生活空間が増大しつつある日本の現状に対して、豊かなイメージと意味をもつ空間が現存するカメルーンの王制社会と王宮建築からは多くの学ぶべき点がある。自然と共生してきた多様な民族文化における価値観や自然観を再評価する必要があるのではないだろうか。筆者がカメルーンでこれまで調査してきたティカールの人びとの神聖王を中心とする王国文化は、人間の自然観を理解するための適例である。

風土景観を把握するためには、対象地域の現地調査を行い、自然環境や集落・建築といった生活空間の機能と形態の特徴を明らかにし、そこで繰り広げられる日常生活、儀礼祭祀、あるいは民族芸術に関する民族学的な調査分析を行うことが重要である。さらに、ジオラマ(diorama)などの景観模型を製作することにより、現地の景観を再現することも有効である。

ヒトが自然に何らかの手を加えることを前提とする環境デザインにおいて、自然生態系、民族文化、民族芸術に関するフィールドワークや景観模型の製作は、新たな「エコロジー思想」に関する知見を得るために意義のある調査研究手法であるといえる。カメルーンの王宮建築に関する本研究は、そのような一例である。